

「第14回 MRA/IC東北アジア青年フォーラム」の開催 足立 憲昭

当協会を代表する事業として8月下旬(8/21～26)に「第3回韓日青少年討論会」、「第14回MRA/IC東北アジア青年フォーラム」が開催されました。その内容をご紹介します。

・「韓日大学生による討論会」：日本から参加の学生たちは、韓国国会議員会館小会議室において、貴重な機会と素晴らしい場所が提供されました。

・「韓国、中国、日本の3か国の大学生によるフォーラム」：「環境開発と保護」をテーマに、大学生の意見発表と熱心な討論会が行われ、さらに3か国大学生の企画による各国文化体験、交流活動等を通じてお互いの友好を一層深めました。宿舎では、夜遅くまで積極的な意見交換が続きました。

これらのイベントを通して、お互いの文化・歴史の違いを認識でき、その壁を乗り越えて、お互いの友情と信頼関係の絆を築けたことに参加した学生たち一人一人が、大きく成長したことでしょう。帰国後作成された、学生たちの報告書にもその感謝と喜びが表現されていました。

MRA韓国本部の車総裁が、東北アジアの平和は将来を担う青年たちの双肩にありと、10数年前にスタートされた種まきが、一歩ずつ着実に実を結ぼうとしています。そして、この地域の安寧と融合の礎となり、世界の平和に貢献する素晴らしいリーダーが巣立つことを確信しております。

ご支援いただいた大韓民国政府女性家族部(省)、MRA/IC国会議員連盟、MRA/IC韓国本部の皆様にご心から御礼申し上げます。「青年討論会」と「フォーラム」が、今後も継続されることを心より願っています。



久々の再会と新たな出会い 慶應義塾大学総合政策学部4年 田 祐奈

私は今回で自身2回目の東北アジア青少年フォーラムに参加をした。前回参加をしたのは2年前であり、2年前に共に参加した青年が今年も参加するという、また私の大学時代の国際交流は本フォーラムがきっかけだったことから、大学4年生の最後の夏休みに再び参加することを決意した。

今回、一番印象に残っていることは久々の再会を果たした友人たちそれぞれの成長と新たな出会いである。2年前に参加した当時、大学1,2年生であった私たちはその場についていくのが精一杯、言葉もままならず状況を理解するのに一苦労していた。しかし2年の間、それぞれがそれぞれの場所で経験を積み重ねた結果、運営スタッフとして、通訳として、代表としてフォーラムを引っ張っていく立場になっていた。私自身、至らない点が多く、キャプテンを務める中で参加メンバーに迷惑をかけてしまうこともあったが、仲間が頑張っている姿、日本側参加メンバーが力を貸してくれたおかげで勇気をもらい、キャプテンという役職をやりきらせていただくことができたと感じている。

また、今回新たな出会いもあった。2年前参加したときには日常会話程度の韓国語しか話すことができなかった。そのため日中韓3か国の学生がいたのにも関わらず、交流することが出来た多くは韓国側参加者

であった。そのことが心残りで、日本に帰国し、中国語を少しずつ学び始めた。その甲斐あってか、今回のフォーラムでは前回よりも中国側参加者と交流ができたと感じられた。

今回は環境問題というテーマで討論が行われたが、ある中国側参加者の意見が大変印象に残っている。「環境問題が今現在どういう状況なのか、またそれに対し中国がどのような影響を及ぼしているのかは理解している。私たちも努力しているから、少しだけ待ってほしい。またアイデアがあったら教えて欲しい、協力してほしい。」という内容を述べていた。私はこの意見を聞いて、ハッとさせられた。自らの立場の意見を主張するだけでなく、相手の立場をしっかりと理解すること、そしてそれをすり合わせるという大切さに気付かされたプログラムであった。



AAR Japan 難民を助ける会 穂積武寛様をお招きしました

IC交流会（4/16）に外部講師として難民を助ける会プログラム・マネージャー穂積武寛様をお招きしてご講演いただきましたので、その一部をご紹介します。先達の理念を継承して国際IC日本協会と共に歩んで参ります。

「今、この正面に相馬雪香さんのお写真があり私は見られているような感じが致します。私はAARには2009年に入りましたので相馬先生は前年に亡くなられており、最初の仕事の一つが相馬先生をお送りする会でした。この中には相馬先生と面識のある方がいらっしゃるのではないかと思います。昔話として伝説のように色々お聞きすることは多くあり、語録の多かった人、また、怖かった人と聞いております。朝、8時位の突然の電話で、ニュースで流れているけれど難民を助ける会としてはどうするの？考えていないとダメじゃないの、と叱り飛ばされることがあったと現会長の柳瀬から聞いたこともあります。この相馬先生の志をついで皆、仕事を続けております。

AAR Japanは1979年にインドシナ難民を支援しようと相馬先生が「インドシナ難民を助ける会」として設立しました。すぐに、アフリカなど海外に支援の場が広がり、創設からわずか5年後に現在の「難民を助ける会」となりました。その後、AARを含む世界中の数多くのNGOが対人地雷を無くそうと国際社会に働きかける国際キャンペーンを行い、対人地雷の製造・保有・使用を禁止する国際条約を成立させることが出来ました。1997年にこのキャンペーンに対してノーベル平和賞が贈られ、受賞団体にAARも名を連ねることができました。

今日は難民問題に焦点を当てるということですので、まず基本のお

話をしたいと思います。難民が発生していて、支援しなければならないというとき、支援対象をどう定義するのは意外に難しい問題です。国連では、こういう人を難民と定義し、それにあたる人々については各国ができる限り支援しなければいけないということが決められています。いわゆる難民条約です。難民条約に書かれていることを噛み砕くと、要は、何かしらの事情があって自分の国に戻れない人々を難民と呼びましょうということになっています。自分の国に戻るとまともな生活ができない、できないどころか自分に危害が及ぶ、命を狙われる可能性があるということです。ポイントは「自分の国を離れている」ということです。自分の国の外に出ている人が「難民」と呼ばれるのです。但し、これは「難民」のいちばん狭い定義です。国連にはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）という難民支援専門の機関があります。UNHCRは条約で定義された「難民」の支援を行うのが仕事ですが、この定義にはまらない人々で支援が必要な人も数多くいます。自分の国から出てはいないが、自分の町は戦場となっていて戻れないという人もいます。こういう人達は「国内避難民」と言われています。UNHCRは、その人が国内にいるかそうでないかで支援をするかどうか決めていくわけではありません。「難民」と「国内避難民」はどこにいるかだけの違いであり、国外であろうと国内であろうと自分の故郷に戻れない、生命の危険に晒されているのであれば支援しますというのがUNHCRのポリシーになっています。」



「国際IC九州サークル勉強会」 溝本とも美



九州からIC活動の一端を紹介します。私たちは井原伸允先生ご指導の下、活動テーマを決めて月1回の勉強会を開いています。その成果を毎年3月、2日間にわたる研究活動発表会という形で行っています。今年のテーマは「日本と朝鮮半島問題」です。昨今、私たちは「北朝鮮・核・ミサイル」などの言葉を見聞きしない日はありません。いつ戦争が起きてもおかしくないような状況です。「なぜ、日本と朝鮮はこのような関係になってしまったのか？」ということから、今年はこの難しいテーマに取り組んでいます。なぜ、近くて遠い国と言われるようになったのでしょうか？相互の歴史や背景を理解できれば見方が変わるかもしれないと各自興味ある分野で学びを進めています。

過去3回の発表会では、戦後70年の節目に戦争の捕虜に対する残

虐な行為や中国問題を扱いました。2016年、2017年は2年連続でISイスラム国のテロ行為はなぜ続くのか？をテーマに掲げ、映像の力で歴史や現状を皆さんに伝えました。映画「アラビアのロレンス」からはヨーロッパ、イスラムの歴史、「おやすみなさいを言いたくて」からは自爆テロや難民について、「パラダイス・ナウ」では一人ひとりのテロリストに物語があるということ。また最新の現地写真からはリアルな状況がわかりました。この研究から、映像はどんな伝え方より説得力があると納得しました。このような学びを続けることによって、今まで聞き流していた情報や映像に興味を持ち、正しい内容をもっと知りたいと思うようになりました。

私たちのIC活動としての勉強会は遠くで起きている出来事も、決して他人ごとではなく身近なこととして真剣に学べる貴重な場となっています。様々な情報が飛び交う今だからこそ「何が正しいのか」を探究しています。いろいろな国の歴史や伝統・文化を理解した上で様々な人々と接することは、結果として自国の歴史文化に誇りを持ち、自分自身を見つめ直すことにもつながるのではないのでしょうか。その指導をしてくださるのは井原先生です。先生は正しい情報を得るためには、常に疑問を持ち掘り下げるのが大切だと、常に仰います。そして自ら実践し私たちの手本となりご指導くださいます。

来年3月3日(土)・4日(日)に研究発表会を開催します。楽しい懇親会もあります。皆様のご参加お待ちしております。

「Youth Camp ×今の私」 村岡 真梨

わたしは2012年度にIC協会の学校訪問プログラムに日本からの参加者として参加しました。そのとき感じたことと経験が動機となり、今はグローバル教育に関わる仕事をしています。今回参加したのは、改めて国や文化をこえた交流・対話の場に身を投げたいと思ったからです。

私にとって今回のYouth Campは、台湾、中国、香港、イギリス、韓国、日本からの参加者と共に、頭も心も体も動かしながら、「今の私」というものを振り返る時間となりました。

このYouth Campの参加をとおして気づいたことが2つあります。

1つ目は、自分を受け入れ活かすことの大切さです。

プログラムの中でここ数年の自分を振り返ると、いつの間にか誰かが求める自分になろうとしていたことに気が付きました。本当はどう在りたいのか、本当は何が好きなのか、本当は何に時間とお金を費やしたいのか、そしてそれは何故なのか。何度も自分に問いかけ掘り下げの中で、誰かが求める自分になって貢献するのではなく、自分を受け入れ長所も短所も活かすことで、貢献できる自分で在ろうと思うようになりました。

2つ目は、世界にはたくさんの違いがある一方で、家族を思う気持ちや愛情、感謝、喜怒哀楽といった感情はみな同じように持っていることを改めて実感したことです。

プログラムでは、お互いの家族の話や、ライフストーリーのシェアなどとてもパーソナルな話をする場面が多くありました。共感したり、異なる考えを伝えたり、勇気に涙を流したり、。国や文化、個々人の違いや境界線はありますが、それらを受け入れ、心を寄り添わせることで、国や文化をこえて、共有できる気持ち・感情があることを改めて実感しました。

5年前の学校訪問プログラムの経験が今の私に生きているように、これからじっくりと、今後の取り組みを考えていこうと思います。

一人一人の出会い、そしてたくさんの学びと気づきのきっかけくださった兼松恵さんに心から感謝しています。ありがとうございました。



2017 Youth camp 9月10日-13日(3泊4日) 於 富士研修所 マーシャル クレイグ (英国)

富士山の麓で、『望む世界への一步は、自ら変わる』のテーマで、日本・台湾・中国・韓国・英国から18名が集い、一人ひとりが、どんな世界にしたいのか、そのための役割が自分にもあることを考える研修。

目的：①自分/相手の気持ちの過程を尊重する。②役割を統行する努力と回復力を高める。③心を静め、心のエネルギーの源を体験する。④内なる自分と心の動機を把握し、決断の選択の仕方を学ぶ。⑤個人と社会・国際関係の繋がり。自分の感情がどこから来ていたのかを見極め、分かち合うことで新しい視点を持つ。人智を超えた大いなる心に導かれていることの学び。手紙を書くセッションから、自分に影響を与えてきた人々、

心の傷、自分も深い愛情をもって受け入れる力を得たこと。ファミリーグループに分かれ、グループの中でのみ分かち合う共通のルールで、安心して話合うことができた。分かち合うことで、心が洗われ、自から大切なステップを踏み出す機会であった。韓 朱仙さんが、北朝鮮の国籍で育ち、

後に韓国の国籍で在日としての歩みから、どのように現実を受け入れ、どんな阻止に合っても心を開き、世界の現状に出来る地球市民としての生き方の学び。また飯塚廣嗣氏による、合理的・体系的な問題解決として、直感的な視点から、問題の焦点を絞っていく設定で、経験と直感に沿って状況の分析の選択からの学び。

参加者の感想：あるがままの自分の感情をうけとめ、尊重できるようになった。内なる感情を受け止め、分かち合う過程を重ねることで、一歩ずつ明確に取り組むことができると確信した。自分の歩み方で、社会への貢献になるよう生きて行くこと。自然と身近に向き合う機会が印象に残った。芝生に横たわっていると、携帯を見たいとは思わない自分に驚いた。携帯があっても、今は必要でない時間だと。朱仙さんの話から、自分の生き方も見直しの選択があることに気がついた。試験の勉強で苦しんでいる自分は、それをしなければならぬということもないのだと。ここからどこへ行き着くのかはまだ定かではないが、ともかくこれから新しい視点で、考え、見出していくことを感じた。海外の参加者とこれだけ密に分かち合う機会を持ったのは初めてのことで、とても大切な経験となった。最近、自分が乗り越えることができたことを分かち合えたことに感謝。



ICビジョン会議 報告 足立憲昭

念願の「ICビジョン会議」が開催された。参加者は協会理事が中心であったが、会員の参加もあり効果的で、理事会では味わえなかった、ファシリテーター(佐々木氏)による、楽しく効果的な運営。その結果「連帯感」が生まれ、今後の理事会にも大きなプラスとなることが予想されるイベントであった。

ICビジョン会議の主な内容は次のとおり。

- 開催期間： 2泊3日 2017年6月16日(金)・17日(土)・18日(日)
- 開催場所： 富士Calm(山梨県富士吉田市)
- 参加者： 17人
- 討議テーマ：「普通の人の1%のチェンジ」
… 国際IC日本協会の存在価値を共に考える
- 討議スケジュール：
1日目：6/16(金) 15:30集合、15:00～：「伝える」
ワークショップ、夜：グループワーク、
2日目：6/17(土) 7:00～19:30マーケティング手法説明、
グループワーク(歓談)

3日目：6/18(日) 9:00～グループワーク、プレゼンテーション、
全体まとめと感想のシェア

■ ビジョン検討委員会の概要

1. ワークショップの課題：参加者が詩(うた)と短句を創る
2. ①ICの精神に基づくリーダーを養成する、
②はじめの一步(森林チーム)、
③自身の生き方を発見するヒントのお手伝い(フランスチーム)
3. 合宿で得られたもの：一体感(合意・融合の感覚)の醸成。
「人の輪」「人の環」「人の和」の醸成。
4. 合意形成のプロセス：新たな始まり、確かな一歩であり、熱く取組んだチームワーク(人の和)の結晶の賜である。「人の和」は、この2泊3日の合宿研修により絶妙な変化と進化を遂げた。



旧吉田茂邸でブックマン博士の本を発見！ 中嶋 良樹

大磯の旧吉田茂邸は一度 火事になり、今年の四月に再整備され一般公開されています。

二階の書庫(吉田文庫)の前で、MRA関係の本がある予感がして、よく見ると ①「世界を再造する」フランク・ブックマン ②「思想は脚をもっている」ピーター・ハワード ③「フランク・ブックマンの秘訣」ピーター・ハワードの三冊を、発見しました。庭園も整備されており大変素晴らしいので、皆様も一度訪れてみてはいかがでしょうか。



第39回 IC国際フォーラムのお知らせ

第39回国際会議 2017年11月25日(土)～26日(日)
テーマ「はじめの一步 ～わたしが変わると世界が変わる～」

於：国際文化会館 東京都港区六本木 5-11-6

第39回を迎える今年の国際フォーラムでは、カミラ・ネルソン氏(ノルウェー)、イエンツ・ウイルヘルムセン氏(ノルウェー)、レンジョウ・リュウ氏(台湾)他、海外からのゲストをお迎えし、MRA/ICの世界情勢を学ぶと共に、MRA/IC運動の提唱者フランク・ブックマン博士の活動を描いたドキュメンタリーフィルム「The Man who Built Peace」の上映を予定しております。各個人の振り返りや、内なる声に耳を傾けることを通して、新たな一歩を踏み出す契機を目指します。

一緒に「はじめの一步」を踏み出してみませんか。



総会のお知らせ

毎年会員総会は、3月に開催しております。

総会では定款規定に従って、理事及び監事の選任、事業報告、貸借対照表等、財務諸表の承認など法令または定款で定められた事項につき、議決いたします。

次回総会 日時：2018年3月11日(日) 13:30より
 場所：IC事務所(東京都新宿区)

どうぞ皆様、この日をあらかじめ手帳に記入してご出席を予定してください。

〈参考〉

過去の総会は

2017年3月12日(日)

2016年3月13日(日)に開催しました。

年間行事

2017年、2018年行事

- 第3日曜日<年8回程度> IC交流会(14:00-16:00 於 IC事務所)
 - 12月17日('17) 外部講師 公益財団法人モラロジー研究所参与 大田区教育者モラロジー賛助会会長 松田貞男様
 - 1月21日('18) 会員 富士箱根ゲストハウス代表 VISIT JAPAN 大使 高橋正美様
 - 2月18日('18) 太田和江理事
- 11月25日・26日('17)
 - 国際IC日本協会 第39回国際フォーラム 於 国際文化会館
- 12月27日('17)～1月3日('18)
 - APYC アジア・太平洋諸国青年会議 於 インドICアジアセンター
- 1月17日～21日('18)
 - インド ICアジアセンター創立50周年 国際会議 於 インド ICアジアセンター
- 2月5日～8日('18) Caux Initiative for Business 国際会議(CIB国際会議) 於 インドICアジアセンター
- 3月11日('18) 国際IC日本協会会員総会 13:30～ 於 IC事務所
- 6月28日～8月13日('18)
 - コーフォーラム 於 スイスIC国際センター www.caux.ch

入会のお願い

当協会は、皆さまからの会費及び寄付金により運営されています。世界の平和につながる青少年の育成や国際交流活動のため、是非ご入会の上、ご支援ください。

当協会は海外の lofc と連携して活動する公益社団法人です。

	会費年額
個人会員	6,000円(議決権を行使できます)
個人賛助会員	3,000円以上
法人賛助会員	50,000円(一口)

編集後記

ICニュース21号をお届けいたします。本号は各公益事業の報告に加え、九州サークルの皆さまより同地区の活動を紹介して頂いております。今後とも会員の皆さまに寄り添い発信してまいりますのでご寄稿・ご意見を賜れば幸いです。(編集委員)